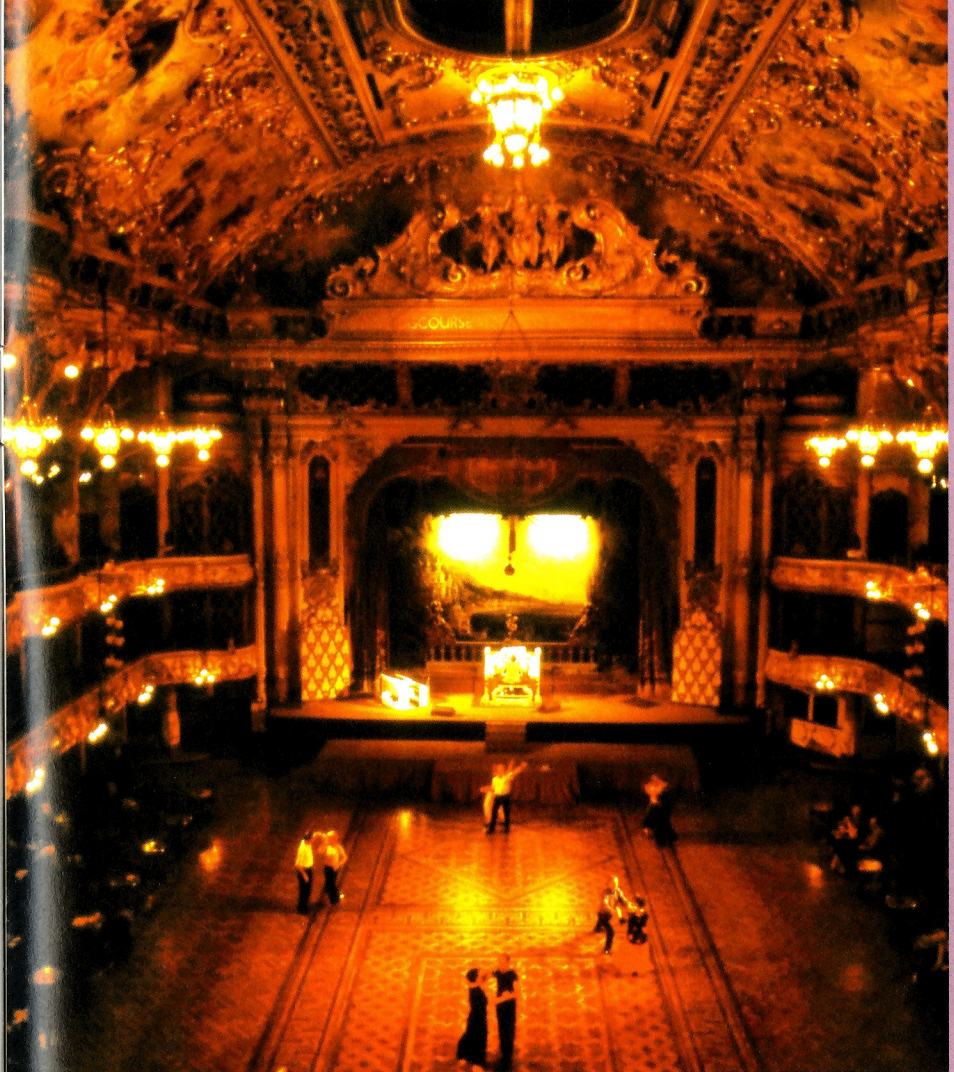


ダンス

ダンスをもたない民族はいないだろう。時代が変わってもダンスは人類の基本行動のひとつである。近年、新しいダンスが流行ったり、消えゆく伝統舞踊を国が保護するなど、事情は多様である。特集では、ダンスの変わりゆく役割や継承について考えたい。



邦画「Shall we ダンス？」にも登場した、イギリスの「タワーボールルーム」



アイヌの鶴の舞(北海道アイヌ古式舞踊連合会所蔵)

ナイジェリア・イボ族のダンス



インドネシア・ジャワ島の仮面舞踏

「社交ダンス」の風景

永井 良和
(ながい よしかず)
関西大学教授

高齢者のあいだでブームに

郊外の住宅地にある公民館を覗いてみると、踊る高齢者たちの姿を見つけることがしばしばだ。男女が身体を接触させて踊るタイプのダンスが中高年のあいだでブームになって、二〇年あまりになる。高齢化もすすんだが、そのぶん、愛好者は屋の時間帯にも活動の領域を拡大した。高齢者がダンスを趣味として再認識したのは、健康の維持はもちろん、リスクの低い性的コミュニケーションの実現が図れるからである。ダンスなど軟派の遊びだという偏見も弱まった。かくして、郊外の公民館は、都心のダンスホールさながらの活況を呈することになった。

彼ら彼女たちが踊るダンスは、「社交ダンス」とよばれることが多い。しかし、

social dance ということは本来の意味の広がりの中において考えると、公民館のダンスは種類も機能も限定されている。そこで採用されているのは、足の運びや型の接続パターンなどの標準が定められた競技タイプのもので中心だ。テレビの人気社交ダンス番組で踊られているものも、多くはこの流れにある。練習して上達するには、特定のパートナーと組むほうが能率的なので、社交のために「パートナー・チェンジ」をする習慣があるそかになることさえある。もともと、音楽を楽しみながら踊る人たちが増えればよいのだが。

近代化とともに

ところで、日本で踊られている「社交ダンス」は、ロンドンに総本山をおく「ボールルーム・ダンス」の流れを汲む。お察しのとおり、大英帝国の遺物なのだ。

競技会やパーティで踊られるボールルーム・ダンスも種目を見ると、いくつかはヨーロッパ起源のものだが、タンゴやルンバなどラテンアメリカの文化からとり込まれたダンスも含まれている。二〇世紀になって、ヨーロッパに輸入された異民族の音楽と舞踊は、西欧人によって編集され加工された。やがて、それらのダンスは、近代化とはすなわち西欧化である(という考えを受け容れた国々へと輸出されていったのである。日本でも、^へ英



ハリウッド版「Shall we ダンス？」公開にちなみ、大阪ドームでおこなわれたタンゴのデモンストレーション



関東州・大連では日本人が社交舞踏を普及させた。ルンバやバンドレも踊られた

国風の本格的なダンスとしてハイカラ人種の心を弾ませた。今のわたしたちは、民族の音楽や踊りを、現地で直接に見聞し、あるいは体験する機会に恵まれている。しかし、かつては、数少ない旅行者が自分自身の身体を媒体として、異文化の踊りを伝えるしかなかった。また、身体運動を文字やイラストによって写しとり、読者がそれらの情報を身体運動に逆変換して再現したのだった。細かいテ

クニックにも誤りは少なくなかったし、もともとの文脈から切断された音楽やダンスについての理解には限界があった。それから一〇〇年近くの歳月が流れようとしている。ヘイングリッシュスタイルのキューバン・ルンバを、桜の国の老人たちがこやかに楽しんでいる。屋下りの公民館の、ゆったりとした情景は、この世界が経験した一世紀の歴史の縮図でもある。

村のダンスと舞踊団

遠藤 保子
(えんどう やすこ)
立命館大学教授

変化するダンス

二〇〇一年、わたしはダンスの調査のために二〇年ぶりにナイジェリアへ行った。ラゴス市内は蒸し暑く、ビルが林立し、道路際には農産物等の露天商が営まれ、自動車渋滞し、排気ガスが漂い、その車を縫ってカラフルな服を着た人びとが運転手に日用品等売りつけていた。この光景は二〇年前と同じである。が、変わった点もある。飲み干した飲料水のビニール袋があちこちに捨てられていることだ。「ごみ箱に捨ててよ」と思いながらも、これは人びとが衛生的な飲料水を廉価に飲めるようになった証であり、不衛生な水を飲んでいたむかしに比べると「ずいぶん進歩したなあ」と感じる。

消えゆく伝統の保存

一九八九年、ナイジェリア国立舞踊団が設立され、伝統的なダンスをベースにした、劇的・娯楽的なダンス公演がおこなわれている。その設立のきっかけは、一九七七年ナイジェリアが世界のアフリカ芸術・文化フェスティバルの主催国になり、さまざまな国々の舞踊団を一堂に会したことを機に、諸外国でナイジェリアのダンスを披露する必要性が出てきたからである。その後政府は、一九八八年の文化政策のなかで、国家は音楽、ダンス、演劇等をフィルム、オーディオテープ、ビデオ、文献資料として記録・保存すべきであること、またそれら三者をレパートリーとする舞踊団を結成すべきである

北へおよそ三〇〇キロメートル離れたオヤン村では、神に感謝し祈りを捧げるために、また先祖を供養するためにさまざまな祭りがおこなわれていた。しかし、今日ではそれがとりやめになり、当然ながら祭りにおける伝統的なダンスも踊られなくなっていた。なぜなら、あらたに就任した王がイスラム教徒であるため、伝統的な宗教にかかわる祭りを排除したからである。他の地方においても同じように、さまざまな理由によって伝統的なダンスが踊られなくなっている、といわれている。

北へおよそ三〇〇キロメートル離れたオヤン村では、神に感謝し祈りを捧げるために、また先祖を供養するためにさまざまな祭りがおこなわれていた。しかし、今日ではそれがとりやめになり、当然ながら祭りにおける伝統的なダンスも踊られなくなっていた。なぜなら、あらたに就任した王がイスラム教徒であるため、伝統的な宗教にかかわる祭りを排除したからである。他の地方においても同じように、さまざまな理由によって伝統的なダンスが踊られなくなっている、といわれている。



ヨルバ族のダンス、バタ。雷の神シャングのダンス

ハウサ族のダンス、カプル。五穀豊穡を祈願するダンス

モーションキャプチャ用のスーツにマーカーをつけてもらうダンサー

舞踊の伝承

福岡 まどか
(ふくおか まどか)
大阪外国語大学准教授

特別な存在の踊り手

舞踊は、身体による表現であるが、その内容は日常的な行為そのものではない。日常的行為を高度に様式化した独特の身体動作によってなされる。こうした身体表現は、神あるいは信仰の対象などの目に見えない存在へ近づきつとつ手段である一方で、王や統治者の権力のよう特別なパワーを象徴する役割も担ってきた。そして舞踊を演じる踊り手たちも、地域やジャンルによって違いはあるもの

の、技と力を備えた特別な存在として位置付けられている。

わたしの研究しているインドネシアのジャワ島では、さまざまな伝統的儀礼の際に舞踊や演劇を上演する。これらの芸能は儀礼を滞りなく終了させるために必要とされており、ときには特定の儀礼に不可欠の芸能が定められている場合もある。ジャワ島北部のチルボンには独特の仮面舞踊がある。仮面舞踊は、誕生、割礼、結婚などの人生のプロセスにかかわる儀礼、また、田植えや刈入れなどジャワのおもな生業である水稲耕作にかかわる儀礼に際して上演する。この舞踊は、複数の仮面を一人の踊り手が付け替えながら、それぞれの仮面があらわす「性格」を演じわけるといふスタイルをもつ。特定の物語を上演することはないが、物語との関連も見られる。上演をおこなう踊り手たちは、踊り手としての系譜を引く人びとであり、彼らは、踊り手(あるいは影絵芝居の人形遣いや音楽家)の系譜のなかで、模倣と実践をおして踊り手としての技を身に付ける。さらに、断食や瞑想などの修行をおして内なる力も身に付けていくのである。

こともあったと言われている。踊りに使う仮面にも特別な力があると信じられており、仮面に供物を捧げ、お香を焚いて祈ることもおこなわれる。仮面の裏側を削って煎じて飲むと病気に効くという話もある。

困難な育成

近年では、このような技と力をそなえた踊り手がなかなか育たない状況が見られる。その背景には、踊り手として生活することが経済的に困難な状況にあること、また踊り手の存在や特別な力に対する社会一般の共通理解が薄れつつあること、などの要因がある。芸術大学などで舞踊を学ぶ生徒がいる一方で、伝統的な社会のなかで踊り手を育成することは難しくなっている。実践的に上演を体験し、模倣を繰り返しながら技を身に付けるやり方は、一見すると効率の悪い学び方に思えるかもしれない。しかし、こうした習得方法によって、ジャワの踊り手たちは舞踊の技とともにさまざまななしごとや専門的知識を身に付けていくことができたのである。これは踊りに限らず、伝統工芸などの分野でも同様である。ジャワの踊り手たちが直面している伝承問題は、日本をはじめ世界の各地で伝統的な技の継承者たちが直面している問題でもある。

特集 ダンス

舞台で衣装をつける踊り手



仮面舞踊の上演(トゥムンガンとジンガ・アノムの戦い)

ダンス

特集

だの、それはそれで現代のわたしたちにはわかりやすいが、眼前に繰り広げられるアイヌの歌や踊りに内在する力は、何かを表現しようという自意識の前に、外なるもの(動物自然)との境界を越えてまず踊り手が鳥に「なな」ことを促しているように思えるのだが。踊る人の美感、観る人の印象、時代の流れ、舞踊の変容。さまざまに揺れながらも、確かな「意味」はアイヌの人びとが踊り、伝えていくことのなかに存在し続けている。

跳びはねながら交差する軌跡を描く。歌いながら踊るその歌には巻き舌の音が挿入される。これは鳥の鳴き声だ。動きは簡素だが、ときに烈しくときに優雅に、短い動きを繰り返す。繰り返しのなかで、踊り手は無心に鳥になる。

伝説的なアイヌ文化では一般に、ひとつひとつの動物や自然現象がそれぞれカムイ(神)であり人間界にそつした姿をとって訪問してきた、と考える。そのカムイを模倣するという、それぞれの踊りの淵源はともかく、絶妙なカムイのしぐさやカムイの鳴き声を現在の伝承のなかにもわたしたちは見ることが出来る。

近年の舞台での上演のなかでも、こうした踊り各種が披露される。観客のための解説も必要になる。「これはこれこれの情景を表現した踊りです」「こんな意味があります」と語り口も増える。もちろん、それは古老の話に基づいていたり、伝承者が自ら古い資料を細解いてきたものであり、決して間違ではない。ただ、舞踊が作品単位で観念的な何かを表現するという考え方は近代西洋芸術の個性主義のそのようである。何となくそぐわないような部分があるようにも、わたし自身は感じる。親子鶴の情愛だの鳥の美しさを惜しむ猟師



白老民族芸能保存会による「サロルン・チカブ・リムセ(鶴の舞)」(北海道アイヌ古式舞踊連合保存会所蔵の写真)

谷元旦「エソ人鶴舞図」(函館市中央図書館蔵)

鳥になる

甲地 利恵
(こうち りえ)

北海道立アイヌ民族文化研究センター
研究課 研究職員

「ヨガック」でもてなし

久保田 亮
(くぼた りょう)

東北大学大学院
文学研究科



男性の演技には力強さが、女性の演技にはしなやかさが求められる

「ヨガック」とは、アラスカ州南西部をホームランドとするチュピック(エスキモー)に伝わるダンス・スタイルである。ダンスはドラフマーが刻むリズムと歌の旋律に合わせてさまざまな物語を写実的に表現する。それぞれのヨガックが伝える物語は狩猟漁

撈活動から人びとに人気のバスケットボールにいたるまでの、彼らにとって当たり前の情景やそのときに経験した出来事を題材としている。

チュピック社会では、毎年新しいダンスを創作しては近隣村落住民を招待する祭りで演じることが慣例となっており、毎年数曲ずつ彼らの演目は増えていく。そのため人びとはその年の新曲を覚えることに余念がない。しかしその一方で、それ以前に創作された「懐メロ」を演ずることは驚くほど関心を示さない。

この点はヨガックが観客に対する「もてなし」であることと深く関係する。同じ演目を毎年繰り返して披露するのではなく、演目を毎年新しくすることが、エンターテイメントとしてのヨガックの価値を高めることに通じているのである。さらに新曲を発表することに加え、観客を楽しませるためのさまざまな趣向を凝らしながら人びとはヨガックを披露する。即興でコミカルな振り付けを織り込んだり、ピエロのゴムマスクをかぶって踊ったり、フラダンスの衣装を身にまといながらも神妙な顔つきで踊ったり、おどけた表情のままエネルギーギッシュに演技したりするダンスの姿に観客は爆笑する。そんなときには決まって「アンコール」の音が観客からかかる。するとダンスたちは汗だくでヘトヘトになりながらも、より速いテンポでヨガックを踊ることで観客の要望に応える。

こうしたもてなし方はむかしから受け継がれてきた作法である。かつて人びとは、動物の霊を招待してはあらたに創作したヨガックを披露してもてなしたという。その観客たちもまた新曲に耳を傾け、演技に顔をほころばせていたに違いない。

踊り継がれる「スイカ・ダンス」

丸山 淳子
(まるやま じゅんこ)

京都大学アジア・アフリカ地域研究
研究科助教

カラハリの砂を蹴散らし、野生のスイカを順に投げ渡す「スイカ・ダンス」。誰かがスイカを受け損ね、踊りの輪が崩れたとたん、笑い声と歓声が響き渡った。サン(ブッシュマン)の人びとが遊動的な狩猟採集生活を営んでいたころから伝わるこの踊りを、政府の設けた定住地で育ち、その生活になじみの薄い若者たちが踊っている。

じつは、彼女たち、隣町で開催される「トラディショナル・ダンス・フェスティバル」に向けて練習を重ねているのだ。いわゆる文化保全や観光振興を目的に、ボツワナ共和国では最近「トラディショナル・ダンス」のイベントが盛んに催され、サン(ブッシュマン)のダンス・グループも、こぞって参加する。「トラディショナル」とはいえ、観客に見せるために工夫が凝らされ、またこの国の人口の大多数を占めるツワナの歌や踊りもとりにいられる。この新しい踊りのスタイルを学校で学んだ若者たちは、そこへサンが古くから儀礼や治療のために踊ってきたものを融合させ、自分たちの演目を作っているのである。

夕方、ダンス・グループの若者たちは、定住地の大き

な木の下に集まって練習を始める。「スイカ・ダンス」など躍動感あるサン(ブッシュマン)の踊りを巧みに織り交せて披露するこのグループは、これまでいくつものイベントで観客の目を釘付けにしてきた。賞金や褒賞を手にしたり、またメンバーの何人かは首都や国外で開催されるダンス・フェスティバルに出演したこともある。都会の学校を卒業した若者たちは、祖父の作った毛皮の衣装や、ダチョウの卵で作ったビーズを身に付け、再び広い世界へとチャンスを探しにでていく。

しかし、練習らしい練習は、最初のうちだけ。甲高い歌声と手拍子を聞きつけた老人たちが集まり、恒例の「スイカ・ダンス」が始まる。老女が杖を放りだし、踊りの輪に飛び込む。お得意のポーズを決め、スイカをポンと高く後ろに投げやると、ヨーロッパに踊りを披露しに行つたこともある孫娘が、素早くそれを受けとり、美しいステップを見せる。カラハリの夕べ、いくつもの踊りが折り重なって、サン(ブッシュマン)の新しい生活を彩る。そして踊りは、世代をこえた関係をはぐくみ、より広い世界との架け橋になりつつある。

踊りながら、ソフトボール大のスイカを後ろ手で上手に投げけるのは、けっこうむずかしい

